

平成 30 年 8 月 31 日現在

機関番号：30125

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04312

研究課題名(和文)後期中等教育における複線制の可能性に関する比較研究

研究課題名(英文)A Comparative Study on the possibility of multiple pathway in the upper secondary school system

研究代表者

岡部 敦 (Okabe, Atsushi)

札幌大谷大学・社会学部・講師

研究者番号：00632340

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、後期中等教育における複線制の可能性についての調査・研究を通じて、日本における高校教育のあり方を検討することを目的とした。本研究のフィールドとしたカナダ・アルバータ州の事例からは、高校段階において具体的な職業に繋がる多様な進路選択のモデルを提示し、進路選択後も路線変更可能な、ゆるやかな複線制が実現されていることが明らかとなった。このことは生徒への聞き取り調査からも、高校在学段階で将来の路線変更を意図した進路設計を行っていることもわかった。こうした取り組みは、困難な課題を有する生徒が将来の自立の可能性を見出し、高校教育の意義を認識することで、中退問題の改善にも繋がること示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to find the possibility of Multiple-Pathways in Japanese high school system. As a comparison, the case of high school education in Alberta, Canada has been investigated focusing on the pathway which high school students may choose. As one of the result of this research, each pathway has been designed not to force student to decide whether university or work, but let them choose their pathway based on groups of occupation. From the interview to students, it became clear that their future career plan is flexible. This flexibility of choosing pathway fill a gap between academic subject and vocational subject and raise the students' self-esteem and self-confidence. From this research, this system has the effect to motivate various types of students who have the possibility of early high school leaving of high school, since it became easier for them to find the meaning of high school education.

研究分野：教育学

キーワード：教育制度 キャリア教育 職業教育 考古教育 カナダ

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、後期中等教育における複線制の可能性に関する研究である。佐々木亨『高校教育の展開』(1979,大月書店)は、日本の高校教育の課題として職業教育と普通教育の二つを合わせ施すという二重性の問題に着目した。佐々木によれば、これは、大学準備教育と大衆教育に分岐していた差別的な複線型の中等教育システムを、単線型の中等教育制度へと転換することが意図されていたという。しかし、高校教育の現状を見る限り、専門高校と普通高校とに分岐され、さらに、ほぼ全ての高校が、高校入試の点数や大学への進学率などから階層化、序列化されているという課題が生じている。さらに、1980年代以降の高校多様化政策によって、総合学科や単位制高校、中等教育学校など、それまでとは異なるタイプの高校が設置され、選択の機会が拡大したが、その一方、既存の制度の中に選択肢が増えたことにより、さらなる競争を生み出しているという指摘もある(広田照幸『格差・秩序不安と教育』(2009、世織書房))。こうした中、生徒に多様な選択肢を提供しながらも、序列化や階層化を生み出さないシステムの構築が必要であると考えた。

本研究の比較対象であるカナダ・アルバータ州の高校教育も、日本と同じ課題を抱えていた。アルバータ州政府は既存の複線型高校をコンポジットと呼ばれる総合制の高校に転換させることによって階層化の課題を解消し普通教育と職業教育の二重性の実現を図ろうとした。しかし、進学か就職かという進路選択の違いは、コンポジット(総合制)高校の内部に、アカデミック科目のみを履修する生徒と、職業教育を中心に履修する生徒という課題を抱えることとなった。90年代以降の「学校から職業社会への移行(School-to-Work Transitions)」改革は、専門性と総合制を合わせ持ち、柔軟

に進路を変更することが可能な職業教育およびオフキャンパス教育プログラムの開発を行った。こうした取り組みは、総合制高校という単線型システムの中に相互乗り換え可能な選択肢を設定し、柔軟性を持ったゆるやかな複線制を構築しようとしていると言える。

Oakes と Saunders ”Beyond Tracking: Multiple Pathways to College, Career and Civic Participation, 2010, Harvard Press)は、こうした動きを、トラッキングからパスウェイの移行であるとし、総合制高校の新たな枠組みであると位置づけている。

本研究では、こうした先行研究の成果を踏まえて、カナダ・アルバータ州の高校教育における職業教育およびオフキャンパス教育の実践事例を分析し、ゆるやかな複線制(パスウェイ)の可能性を検討し、日本の高校教育カリキュラムの在り方を検討した。

### 2. 研究の目的

本研究では、日本における後期中等教育のあり方について検討することを目的とし、普通教育と職業教育の統合という戦後高校教育設立の方針でありながら、未だ現実のものとなっていない課題に焦点をあて、生徒に多様な選択肢を与え、学ぶことの意味を見いだすことのできるシステムの構築を目指した。比較事例として、カナダ・アルバータ州の高校教育システムを取り上げ、生徒が多様な選択肢の中で、どのような学びを展開しているのか、また、どんな生徒が何を選択しているのかについて明らかにすることを試みた。

### 3. 研究の方法

本研究は、高校教育におけるゆるやかな複線制の可能性を検討するため、日本と同じ単線型中等教育システムをとりながら、多様な選択肢を提供しているカナダ・アル

バータ州の高校教育を中心に調査を行った。具体的には、アルバータ州政府の教育政策文書およびアルバータ教職員組合の見解を示す文書、およびアルバータ州内の教育学者の論文などを中心とした文献研究と、教育行政機関のカリキュラム開発担当者、学校教員、生徒およびオフキャンパス教育を提供する企業の担当者らへの聞き取り調査を中心とした質的調査を中心に進めた。当初の計画では、アルバータ州の他に、オンタリオ州やケベック州などカナダ国内の他州との比較を計画していたが、一回の調査期間にかけられる時間に限度があり、実現することはできなかったため、アルバータ州を中心とした調査に止まらざるを得なかった。

具体的な調査の内容は以下の通りである。

#### (1) 高校カリキュラムの選択と卒業後の進路

第一に、生徒の進路志望によって、高校で履修するカリキュラムにどのような特徴があるのかについて調査した。第二に、高校修了を認定する多様な形態について調査し、高校修了という資格をどのように確保するのかについて明らかにした。第三に高校卒業後の進路選択とその後の進路変更の柔軟性について調査した。

#### (2) 高校卒業後の進路上の選択肢が全ての生徒に開かれているか

高校卒業率を見ると、学生が心理的感情的な課題を抱えている場合、先住民族をルーツに持つ場合などで、それ以外の学生と比較すると著しく高い数値を示していることがわかる。こうした状況下で、進路選択が全ての生徒に開かれていると言えるかについて調査した。

#### (3) 複線型後期中等教育を支える仕組み

多様な選択肢を持つカナダ・アルバータ州の後期中等教育を支える仕組みとして、企業と教育委員会・学校との繋がり

職業教育をより多くの生徒が履修できるようにするためのシステムについて調査を行った。

#### 4. 研究成果

本研究では、後期中等教育における複線制の可能性に関して、カナダ・アルバータ州の事例を中心に調査・検討を行った。アルバータ州では、4年制大学への進学が最善の選択であると考えられる親や生徒、教師の狭い進路志向から、アプレントイスシップや工科専門学校(Technical Institute)や2年制カレッジなどへの進学を含め、より幅の広い進路選択へと視野を広げることを目指してカリキュラム改革が行われてきた。この改革には、職業教育プログラムの改訂、職場を学びの場としたオフキャンパス教育の推進と改訂、高校における履修単位認定システムの改訂などが含まれる。また、こうした改革は現在も進行中であり、本研究もまた継続する必要がある。現時点での成果として、以下の3点をあげる。

#### (1) ゆるやかな複線制

生徒への聞き取り調査から、高校卒業後の生徒の進路志望は、進学か就職か、あるいは大学かその他の中等後教育機関かといった二者択一の選択ではなく、アプレントイスシップを経て職能資格を取得したのち、就職し、その後4年制大学へ進学しキャリアアップを図るといった、自由に乗り換え可能な進路選択を志向していることが明らかとなった。また、特に、職業技術系科目群(Career and Technology Studies)のカリキュラムは、進学か就職かではなく将来の職業分野別に分類されており、「大学に進学するのに必要だから」という理由だけではなく、将来の自分の専門性を見つけるための手立てとなるような科目選択が可能となっている。また、高校におけるキャリア教育の一環として、NPO組織である Careers: The Next Generation

などから外部講師を招いて、キャリアプランニングの機会を与えている。この際に、必ずモデルケースとして、高校 大学 就職といったリニアモデルではなく、高校から就労への移行の中に大学やその他の中等後教育機関での学びの機会が、複数のパターンとして提示されている。本研究から、複線制として提示される複数の選択肢は、一度選択すると変更不可能なものではなく、いつでも選択したコースを変更することが可能となるように設計されている。また、そのような選択の仕方をモデルとしたキャリア教育が行われ、ゆるやかな複線制が現実のものとなるよう手立てが講じられている。

### (2) 職業教育の新たな役割

職業教育は複線制を維持する上で、重要な役割を有している。近年では、高校修了率を向上させるための方策の一つとして、生徒が高校教育の意味を見出すことができるようなカリキュラムの構築が求められ、職業教育の新たな役割となっている。特に、社会経済的な問題により、就学意欲が低く、学力不足の課題を抱える生徒にとって、実社会との関連が強い授業内容は、興味関心を引きつけるということが本研究から明らかとなった。さらに、職場を学びの場としたオフキャンパス教育は、教室内での学習になかなか興味を見出すことができない生徒にとって、高校を卒業しようとする意欲を高める上で大きな役割を果たしていることが明らかとなった。

### (3) 州教育省の高校教育政策との関わり

2015年度より、アルバータ州教育省は、主に高校中退対策として高校再構築 (High School Redesign) 政策を導入した。この政策の中心的な位置付けとなるのが、カーネギーユニットの廃止とコンピテンシーに基づくアセスメントの導入である。この新たな政策により、高校での単位修得の方法が大きく変わる。現在のところ、州内の全ての高校に導入されているわけではなく、本研究の中心

的なフィールドとして調査を行なったカルガリー市内では先進的な取り組みがなされている。すでに複数の高校では、生徒が教科横断型のプロジェクト型の学習に参加することによって、普通科目と職業教育の区別なく、複数の教科の修得単位が授与されるという方法が導入されている。これによって、高校のカリキュラム運用において、職業教育の履修をより多くの生徒にとって可能なものとし、大学進学以外の進路選択を支援するという意味を持っていると言える。

以上、3つの研究成果は、現時点における本研究のまとめであり、まだ分析しきれていないデータが残されており、継続的に分析を進める必要がある。また、限られた時間の中での生徒への聞き取り調査では、十分な人数からのデータを得ることができなかった。このことから、今後においても継続的にカナダ・アルバータ州における定点観測的な調査・研究の必要性があると認識している。

本研究の最終目的である、日本の高校教育に対する提言について、3点あげておく。一つ目は、普通高校での職業教育導入である。2011年の中教審において、高校におけるキャリア教育・職業教育の推進に関する提言が出されている。キャリア教育については、すでに多くの高校において興味深い実践が行われているところであるが、普通科における職業教育の提供という課題については、ほとんど進展がみられない。この点について、今後は企業などとの連携を図り、学びの場を必ずしも学校内に限定するのではなく、地域や企業に新たな学習機会を設けるなどの方策を検討する必要がある。

第二に、学ぶ意味の重視である。日本における高校中退率は、学校間の格差が著しく、その実態を掴むための正確なデータを得るのは難しい。しかし、高校によっては、入学後3年間で卒業することのできる生徒の割

合が50%程度の場合もある。この理由として、問題の背景にある貧困や発達障害などの課題から学力不足や意欲低下などへと繋がる可能性が指摘されている。高校教育段階で具体的な職業に接続するカリキュラムの設定は、高校での学習の意味を認識し、学習に対する主体性を高める上で不可欠なことと考える。

第三に、企業の積極的な教育への参加の必要性をあげる。第一、第二の提言の実現には、実社会で学習者を受け入れる企業の参加が必要である。このような学校教育への参加は、少子化や過疎化などにより求人難で苦しい経営を余儀なくされる企業にとって、質の高い人材を確保する可能性につながる実践となる。

以上、現時点での報告とする。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

岡部敦(2016)『高校教育における職業教育の可能性について』「進路指導」第89巻第1号 pp.12-20

岡部敦(2017)『社会的包摂を目指す高等学校教育の可能性:カルガリー市の実践を中心に』「北海道キャリア教育研究」第1号 pp.1-12

岡部敦(2018)『高校カリキュラム改革と高校中退問題:アルバータ州の高校再構築(High School Redesign)政策』

「北海道キャリア教育研究」第2号 pp.2-11

〔学会発表〕(計 6件)

岡部敦、中等教育における Early School Leavers 対策について-カナダ・アルバータ州の事例を中心に-、日本比較教育学会第51回大会(会場:宇都宮大学峰キャンパス)平成27年6月

岡部敦、Symposium: The Possibilities of Career-related Education Over Difficulties、国際キャリア教育学会2015年大会(会場:つくば国際会

議場)平成27年9月

岡部敦、カルガリー市における Vulnerable Youth 対応の取り組み、カナダ教育学会第47回研究会(会場:筑波大学東京キャンパス文京校舎)平成28年6月特別企画シンポジウム

「社会的包摂を目指すキャリア教育の可能性」日本キャリア教育学会第38回研究大会・北海道キャリア教育・職業教育フォーラム2017(会場:札幌大谷大学)平成28年10月

岡部敦、A Study on the Career-related Education for the Vulnerable Youth、国際キャリア教育学会(International Association for Vocational and Educational Guidance: IAEVG) スペイン大会(会場:国立教育大学、スペイン・マドリード)平成28年11月

岡部敦、The Possibilities of Career Education for Vulnerable Youth、アルバータ州キャリア発達学会(Alberta Career Development Conference 2017)(会場:Fantasyland Hotel, Edmonton)平成29年5月

岡部敦、Flexibility of High School Education and Students' Engagement

-Policy on High School Redesign in Alberta, Canada, The 39<sup>th</sup> Conference of Japanese Society for the Study of Career Education (会場:上越教育大学)平成29年10月

〔その他〕

(招待講演)

岡部敦、High School Education for Vulnerable Youth: Perspectives from Japan and Canada, Graduate Course EDPS631 of Werklund School of Education, University of Calgary, Foundations of Career Development in the spring semester, 2016 (会場:カナダ・カルガリー大学教育学部)平成29年7月

(フォーラム主催)

日本キャリア教育学会第39回研究大会兼北海道キャリア教育職業教育フォーラム2016の企画・運営、テーマ:「キャリア教育を問い直す」(会場:札幌大谷大学)平成28年10月

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

岡部 敦(Atsushi Okabe)

研究者番号:00632340

札幌大谷大学・社会学部・講師